

## 彙報

## 周藤吉之博士を偲ぶ

斯波義信

我が国の中国宋代史研究における中心的なパイオニアであり、透徹精緻、洽博周悉の学風と業績によって、令名を国内・海外に広く馳せていた周藤吉之博士は、一九九〇年一月二二日の未明に逝去された。享年八二歳。

先生は公職に任ずること四一年、そのうちほぼ前半は史料編纂官および研究所員の職に当り、後半は大学において、研究に加えて後進の指導誘掖に挺身された。この間、先生の拓かれた学問地平は、(イ)宋代社会経済史、(ロ)朝鮮高麗および李朝期の官制史と社会経済史、および(ハ)清初旗地制度史、の三部面、三極にわたり、主著八冊、共訳注書一冊、共著の史籍解題一冊、その他共著三冊、論文・論評・書評等約一三〇篇を著した。この学術活動を通じて、先生の学問は一方では一次資料の実地探索で培われた体験、そ

して基礎文献の徹底した読破によっておのずと備った慧眼な事実認識力で強く裏打ちされており、その一方でまた明確な問題史的関心として、(イ)農民生活史、(ロ)土地制度史、(ハ)国家政体と農民、という密に相關する基軸の焦点が一貫して用意され、「周藤史学」と呼ぶべき明快で凝縮された体系をなしていた。その一精華としての学位請求論文は、東京大学東洋文化研究所報告書『中国土地制度史研究』(一九五四)として公刊され、一九五六年、日本学士院賞受賞の榮譽を与えられた。仁井田陞博士の讃辞を借用すれば、「今世紀最大の中国学成果の一つ」である。

公職の後半期、先生は、東京大学文学部への出講(一九四九)にはじまり、同大学院人文科学研究科東洋史学課程担当(一九五三)、同文学部東洋史学第二講座担当(一九五七)に任じ、またこれに前後して法政大学、名古屋大学、高知大学、北海道大学、明治大学、東京大学教養学部、駒沢大学、熊本大学、東京教育大学へ出講し、東大定年退官(一九六七)後の一〇年、東洋大学文学部教授に任じ、多くの学部・大学院生の教育に当られ、先生独特の篤実でしかも史実復原の鉄則に則した講話を通じて蘊蓄を披露され、幅広い領域にわたる次世代研究者を育成された。

先生は寡黙にして独立独歩の風格を備えておられ、研究室や御自宅でお目にかかれたときには温容をもって応対し

て下さり、時に世事にも及ばれたが、おもには学問を語られ、御身辺の私事を話されることは少なかった。ただ、御自身の筆で、「私が研究生活を始めた頃」（『岩波講座世界歴史・月報』一三、一九七〇年五月、第四卷付録）、「思出の記」（けんぶん七、一九八七年八月）、「中国旅行記」（同上九、一九八八年五月）の記事を残しておられる。これらの御自傳を参照しつつ、先生の御生涯の概略を回顧し、御業績と御遺徳をここに偲びたい。

## 二

周藤吉之先生は、一九〇七年二月二五日、加藤繁、青山公亮、中村元先生らと御同郷の島根県で、簸川郡直江大字下直江（現斐川村）の庄屋の旧家に生まれた。姓は「すとう」と訓むのが正しいとうかがっている。一九一三〜一九二一年に小学校、一九二〇年に高等小学校で学ばれ、一九二〇〜二四年の間、松江市の島根県立商業学校で学ばれ、はじめは実業界入りを志された。このため知人の医師のすすめに従い、当時新設の松江（旧制）高校をへて東京帝国大学法学部へ進学する道を予定され、高校入試資格取得の検定試験を商業学校四年次末（一九二四年一月）に和歌山中学で受験して、全受験者中ただ一人合格し、一九二四〜二八年、松江高校文科乙類に在学され、文学や経済の読書を広められた。

松江高校では青山公亮先生の東洋史講義に興味をそそられ、同級に後年の漢代史專家の平中芥次先生がいた。たまたま二年次のとき重症の肋膜炎のゆえに休学し、予後の病弱をかこっておられた先生は、ついに実業界入りを断念され、史学者としての立身を考えられた。小学校以来の歴史へのつよい潜在関心がこの転進の一端に与っていた。

病身のまま松江高校を卒業された先生は、商業学校在学中からの一時期に生じていた周藤家の家計の不如意も考えて、二年間を地元の小学校教師として過したのち、一九三〇年、東京帝国大学文学部の入試に合格、東洋史学科に入学した。同級に山本達郎、中嶋敏、青木富太郎、吉田金一、鈴木朝英、丸亀金作、山本文雄、小林知生等の方々がおり、教授陣は池内宏、加藤繁、和田清先生であった。高校以来の経済書の閲読に加え、ワグナーの『中国農書』、マルクス『資本論』、カウツキーの農業問題に関する著作などを読み、また東洋文庫に将来された『宋会要』食貨抄本、同文庫所収の藤田文庫、静嘉堂文庫収蔵の陸心源蔵書をはじめとする当時稀覯の典籍を涉猟し、加藤繁教授の指導下で「宋代の農民生活」と題する卒業論文を提出した。

当時、内外の大不況下で即座の就職口がなく、帰郷を余儀なくされた先生は、大学在学中からその明快な論理に傾倒していた恩師池内宏教授のすすめで、卒業論文をもとに

「宋元時代の佃戸に就いて」の一文を草し、『史学雑誌』四編一〇・一一号、一九三三年『唐宋社会経済史研究』一九六五に再録）に掲載された。この論文は宋代の農民問題研究者としての先生の名声を一挙に確立し、後年の、関連する著述の構想枠組みを示したもので、絶讃と激励を寄せた仁井田陞博士との永年の交友がここにはじまった。

一九三三年九月から三年間、池内宏教授の斡旋で先生は丸亀金作先生とともに朝鮮総督府・朝鮮史編修会囑託に任じた。この頃、稲葉岩吉、中村栄孝、末松保和先生らの先輩の知遇を得、李氏朝鮮初期史の編修分担を本務としながら、麗末・鮮初の荘園制、佃戸制、奴隸制、財政、産業に関する数篇の論文草稿が成り、一九三四―四二年にかけて公表された。併せて先生は土地売買文書、奴婢売買文書、ことに二〇〇枚に及ぶ両班旧家収蔵の一括文書の購入、そして両班李滉の陶山書院、同柳成龍の生家とその資料の見学および調査に活躍された。なかんずく二〇〇枚の一括文書は、両班であり地主であった旧家の保有した田畝つまり陸田・水田、の売買、買戻付売買、質入、相続諸文書、奴婢相続文書、土地台帳、小作料取立帳、宅地借地料取立帳、莊園管理人権利売買、水車・風車売買、牛畜賃貸の諸文書を含むもので、文書の年代は一七世紀半ばから一九世紀末にわたっていた。のちに先生が宋代農村史の収集史料

のなかから、農村に慣行として生きる複合的な土地制度、動産・不動産の売買、質入、譲渡関係の精細な実態を逐一実証し復原してゆかれたが、この田畝文書分析に際しての、地主経済に関する知識体験が先生の分析眼を支えていたことはまぎれもなく、この実地資料知識にもとづく分析の手法は先生独自の境地であった。惜しくもこれら文書は一九四五年、空襲による本郷曙町の御自宅の被災とともにすべて焼失したが、研究の成果と資料抜萃は「朝鮮後期に於ける田畝文記に関する研究」（『歴史学研究』七巻七八・九、一九三七年、のち「朝鮮後期の田畝文記に関する研究」『清代東アジア史研究』一九七二に収録）に載った。ソウル在住四年目の一九三六年、先生は黄疽にかかり、退職して帰国加療し、翌一年を郷里での静養と収集文書の整理に費した。

一九三八年、病いも治った先生は、財団法人服部報公会の学術助成金による一年間遊学の資を得、上京して恩師和田清（理事）、加藤繁両博士の研究活動の場でもあった財団法人東洋文庫で研究に従事された。テーマは「満洲農民史の研究」であり、満鉄の『満洲旧慣調査報告』全九冊を購入精読しつつ関連文書資料や文献を読破した。研究は清朝初・中期の旗地制度に向い、その成果はつづく東方文化学院在職期にかけ一篇の専論に公表され、一九四四年、

最初の主著として河出書房より『清代満洲土地政策の研究——特に旗地政策を中心として——』の一書として和田清博士の序を付して刊行された。戦争末期に二〇〇〇部刊行された本書は、いまだは余り流布していないので、その構成の概要を掲げておこう。総論三二頁、第一章、清朝の入関前に於ける旗地の発展、九七頁・地図一葉、第二章、清代に於ける奉天の旗地政策、七〇頁、第三章、清代に於ける吉林・黒龍江の旗地政策、一一四頁・地図一葉、資料〔満文老檔〕、〔内務府檔案〕、〔実録〕、〔皇朝経世文編〕等〕五二頁、文献解説、〔清国行政法〕、〔満州旧慣調査報告〕等〕、二九頁、索引一三頁、から成り、和田博士の序でも言及されているように、時局的解説書ではなく、原史料や旧慣調査報告から事実を発掘しながら、清朝入関前後にわたる満洲への植民定住史、旗地の接収設立経過、その荘園制経営について、先人の未開拓分野の空白を埋め、総合的に叙述したもので、『東放学報』（東京）一一一—「清朝に於ける満洲駐防の特殊性に関する一考察」、同一二—二「清朝の入関前に於ける旗地の発展過程」の両論考が全叙述の基礎をなしている。本書は先生の処女出版であり、明快に問題点、研究史的状况を述べた総説、つづく緻密な考証本文、簡潔な結語、そして資料・文献解題、を一貫して、史料探索と経済動態解析が密に融和した先生の文章ス

タイトルが典型的に示されている。

右の書の成るに先立ち、一九三九年、再び池内博士の斡旋のもと、先生は在京の有数な東洋学研究機関であった東方文化学院に職を得、旗田巍、三上次男、百瀬弘、松本善海、村上正二先生らと共に、委託事業部（東亜研究所）研究員を任命された。前述の旗地制度や清初・中期財政の論考を世に送り、朝鮮をへて東北、華北にはじめて調査の足をのびし、瀋陽では奉天図書館所蔵の旗地文書を閲読調査した。この間、一九四一、四二年、日本学術振興会の援助で「清朝に於ける八旗制度の研究」に従った。一九四三年、池内博士の推輓で先生は東方文化学院の正規研究員の列に加わり、やがて一九四八年、同学院が東京大学東洋文化研究所に合併吸収されるに当り、結城令聞、米沢嘉圃、窪徳忠、西嶋定生先生らとともに東文研に移られ、研究員をへて四九年、同所の歴史部門助教に任ぜられた。

先生の東洋文化研究所在任は一九五七年八月まで足かけ一〇年であった。同所には旧学院の徐則恂旧蔵の東海蔵書楼に加え大木幹一氏寄贈書（大木文書）があり、研究活動の目標に「既成諸科学の統合、新学際研究領域の開拓」を掲げ、これに即応する総合的研究プロジェクトの一翼として、アジア諸地域とくに中国を中心とする土地所有構造の歴史的分析が当時設定されていた。先生は積年の学友仁井

田陞博士が主宰する「中国における土地所有の史的展開」研究計画に、西嶋定生、松本善海先生とともに加わり、同所の飯塚浩二、福島正夫先生と談論を交え、またこの頃を通じて同所助手として前後に活躍した衛藤藩吉、古島和雄、堀敏一、小倉芳彦、佐伯有一、重田徳、柳田節子など錚々たる若手研究者に囲まれ、ここに再び卒業論文のテーマに立ち戻って、宋代の土地所有制、農業問題の究明に全精力を傾注されることになった。

これより先、福田徳三博士の主唱のもと、加藤繁博士が主宰して大正中期から営々と挙行されてきた中国歴代食貨志譯註の事業は、一九四六年、加藤博士の急逝ののち、和田清博士が継承し、一九六八年まで維持され、着々と成果が公刊されていた。先生は「宋史食貨志」中の序章、農田、方田、賦税、布帛、和糴、屯田、常平義倉、役法、振恤の章をもともと担当されていたようである。譯註は先生の研究の真骨頂の一部面であり、宋代史への関心の回帰とともに、側面よりみて驚歎すべき速さと精確さをもって、ぼう大な基礎史料をまたたく間に涉猟かつ整理し、つぎつぎに担当部分の成稿をつくり上げてゆかれた。

## 三

先生は一九五七年八月、かつて師の加藤繁博士が担当した東京大学文学部東洋史学第二講座教授に招かれた。東洋

文化研究所から文学部定年退官の一九六七年にいたる一年間、あたかも堰を切って流れ出るように珠玉のしかも長編の研究成果が続出し、唐、五代、宋、元にわたるこれら論考をまとめた主著六冊が成り、学術上の高遠な地位は不動のものとなった。

先の処女論文「宋元時代の佃戸に就いて」は、土地保有制の実証的再構成を手固く追究したものであったが、『宋代官僚制と大土地所有』（日本評論社 社会構成史体系第八回、一九五〇）では、唐末から南宋にかけての時代のスパンのなかで、江南を中心に生じた生産力高揚の駆動者であった新興地主層（形勢戸）が、官僚登用機構の刷新に自らを適応させ、官戸身分のエリート勢力として大所領を有利に形成しつつ、政界の要職を独占してゆく事情を克明かつ整然簡潔に描写した。宋代の支配層がいかにして旧体制を瓦解させつつ、次期の長期政権独占につながる方向に歩みだしたか、宋代を特色づける社会的移動の明と暗を解明してみせた力作であった。

つづく『中国土地制度史研究』（一九五四）でも、論点は、(イ)荘園地主制機構、(ロ)荘園地主制と中小土地経営の相関、(ハ)国家官僚機構と荘園地主制、の三点の綜合立体相関という角度から整理が施され、宋代の政治、経済、社会的権力構造は、荘園内の封建的主従関係に原点をおきながら

も、全体機構としては国家とのタテの、また小土地経営とのヨコの緊張関係のなかで機能したという解釈が下された。本書では一つには佃戸の実態に關し、文献学的極限に近い実証が施されて、地域環境別、経営類型別、官私田別の幅広い態様がつきとめられ、一つには方田法、經界法として公田法にいたる、政府の立ち入り丈量と官戸寺觀限田法をテコとする、国の対大所領規制方策の承譜的發展がたどられ、およそ宋代土地制度史を明清期の展開との展望で理解する上での、基礎テーマと基礎典拠が集約的に提出され、学界に空前の貢献がなされ、一九五六年、東京大学博士号および学士院賞が与えられた。

右の業績公刊に刺激されて、学界では密度の高い宋代および明清代社会經濟史の論議があいつぎ、その焦点はやがて先生が右書で注視されながらも、まだ十分展開していない問題に向けられた。すなわち小農経営の実態および、資産評価、鄉村編成、刑法適用、徭役等課税賦課、賑恤などを通じての國の干渉のあり方、生産力・技術の諸問題、莊園・佃戸経営の多様な存在形態とそれをめぐる官私田の別、地域發展の別、社会分化の差違との間の整合的解釈などである。先生はこうした問題展開を意識しつつ『宋代經濟史研究』（一九六二）、『唐宋社会經濟史研究』（一九六五）の二著に収まる計二六の論考を著し、農業生産関係、鄉村制

と徭役、職役関係、水利田関係、佃人・佃戸制の諸形態、農村市場関係、限田論とその効果、などをめぐる豊富な事実関係を学界に提供された。これに先立つ一九六〇年、和田清先生編『宋史食貨志譯註(一)』が公刊され、その大半を占める序、農田、方田、賦税、布帛の章を執筆し、これに伴う徹底した史料の読みこみ、ことに国家の諸政策をめぐるそれが、この期の先生の論考に如実に現れている。さらに退官まもなく著された『宋代史研究』（一九六九）には、佃戸制、水利田、義役の諸論考とともに、譯註に付帶する成果としての、王安石、新法、三司の制、収税機構および國史食貨志・同列伝、建隆編等の原初史料・典籍の研究が収められている。

東京大学退官後、東洋大学で教鞭をとられた先生は、王安石新法の研究、および宋代佃戸制と國の私債・私租減免政策を論じ、五代、宋代の概説を著されたのち、高麗史に再び取り組まれた。かつて田畚文書の御研究から宋代の農民問題を解析されたように、今度は宋代の官制への深い造詣を手かがりに、難解な高麗朝の中央政府機構の沿革や機能につき、宋制との比較対照を試みつつ犀利な解析を加えられた。この業は逝去のため惜しくも半ばで止ったが、その成果の過半は『高麗官僚制の研究』（一九八〇）に収められている。また、先生が三〇歳代の後半に精魂を傾けて

解き明かされた清初の旗地制の研究は、同分野を開拓した礎石として今日なお光彩を放っているが、一九七二年に朝鮮李朝の田雀文記についての研究・解説・紹介を併せて『清代東アジア史研究』の題名の下に公刊された。

## 四

こうして先生は、(4)宋代社会経済史(ことに、土地制度史)、(5)朝鮮高麗および李朝の官制史、社会経済史、(6)清初・中期旗地制度史の三分野を通じて、それぞれに不朽の業績を挙げられた。実業界への志望と中途で袂別して、終世学究の道を歩まれた大半の理由は御病身にあり、研究職、教育職のあいだも、先生は何度か大病を経られたが、先生は決してこれに屈せず、常時その瘦身の体力を駆使し、張りつめた気迫と集中力を揮って、取り組まれた課題をつぎつぎに消化し成果を挙げられた。これは先生の非凡にして傑出した才能と人格のいたすところであろうし、美代子夫人はじめ御家族の温い支持によるところも大きいと思われる。

先生の研究三分野の御仕事は、いずれも空白から着手したパイオニア領域であった。先生がいつどこで漢文の習練を積まれたか今は知る由もないが、大学院の講義、食貨志研究会の輪読会に臨席したとき、先生は抜群の読解力を示され、研究会では同輩の諸先生も一目を置かれていたこと

を思い出す。先生はまた統計的・数学的分析に強い上に、青春時代よりの経済書への親しみとあいまって、起承転結、一貫して明快な論法で論考に筋を通され、独自のスタイルの文章を書かれた。対象が未知で複雑であるだけに、先生の頭脳によるぼう大な原資料の整理と濾過、そして分析の明晰さは、研究の開拓の上で大きな貢献であった。

パイオニア領域への歛入れについては、恩師の加藤先生も清国行政法事業への参加のなかで基礎文献を単独で収集渉猟し、同時に実地慣行を知悉して事実から用語・概念を抽出しつつ、洞察を深めてゆかれた。その加藤先生は『支那経済史概説』(一九四四)のなかで、「戦国秦漢、南北朝の間、大官豪族の大所領は主として奴僕によって耕種されたが、均田法の崩壊と前後して奴僕の使用が衰え、小作人の使用が流行した。大地主の大所領である荘園の土地を耕作したのは主として小作人(佃戸)であり、宋代に入つて小作制度はますます発達し、北宋時代における自作農と小作農との割合はおよそ二対一ぐらいであった」(第三章土地制度)という趣旨の展望をされている。一九一六年に『支那古田制の研究』を著してのち、財政、商業、産業史に関心を移された加藤先生は、周藤先生に田制研究の大役を課されたのであろう。もともと日中欧の間の中世荘園制度の比較法・比較経済史研究は、内田銀藏・中田薫・野

村兼太郎博士らの提唱にはじまる明治・大正・昭和初期学  
界の大きな課題であった。

「宋元時代の佃戸に就いて」における先生の学問境地は、  
加藤先生の展望枠組みに即しつつも、南宋・元の史料の証  
言を通じて、大地主・豪族の所領の拡大、貧民下戸の苦境、  
国家の干渉努力とその度重なる挫折という、内攻し大地主  
制に傾斜してゆく長期の動向を把握された。李朝兩班の土  
地所有、清初旗地所領の形成と変質を調べられた先生は、  
長期展望として在地レヴェルでは封建色濃厚な土地経営  
が、近千年の中国およびその直接周辺部一帯に広く普及を  
とげたという見通しに立たれたと思う。

戦後に、装いを新たに登場した、普遍的な角度からの  
封建制社会構成についての比較論議の中に身をおかれた先  
生は、資料限界ぎりぎりまでに宋代佃戸の実態を復原され  
るにとどまらず、宋以後にも延命再生した官僚制という中  
国独自の権力機構のなかで、国の農政は大地主制への傾  
斜、およびこれに蚕食される貧民下戸にいかなる対処をし  
たか、という方向でも研究を展開された。晩年の関心が王  
安石の諸問題に回帰されているのは象徴的である。加藤先  
生が戸数上の主客戸比率によって全戸数の三分の二と概算  
された自作小経営の実態への取り組みが、次世代学者の手  
で着実に進行しつつある今日、先生の着眼を進めて宋代の

農民問題の全容に総合的な解釈が下される日も近いと思わ  
れる。

もう一つ、先生は空白の野を単独で埋める先達であつた  
だけに、社会学的意味での諸制度の法制的、公分母的標識  
を明確に摘出することに意を注がれた。「某々制」と題す  
る論考がきわめて多い。ジカク書を欠き、しかも時・空を  
通じ社会分化と地方偏差に富む旧文明社会中国では、現象  
の平均化した叙述は容易ではない。先生の後半の労作では  
地域性、発展度の先後、同一用語内容の類型差を意識され  
た慎重な叙述が多い。この全体と部分との関係という問題  
は、マクロ・ミクロ分析を補強するための中間理論が学界  
でまだ萌芽状態であるため、むしろ次世代学者の手に課さ  
れた課題である。

教師としての先生は、つねに根本資料の選別を、そして  
引用に際しては、原史料で該当する箇所を長文をまず手許  
に控え、熟考吟味をへて核心部分を論文のなかで示すこと  
を、ともに強調された。静嘉堂や東文研研究室でお目にか  
かったとき、先生は終日うず高く積まれた典籍を黙々と読  
破されつつ、細字でメモを書き抜いておられた。先生から  
以心伝心の形で伝わる史料処理の手續きは、『宋史食貨志  
譯註(一)』はじめ主著・諸論文の行間にも如実に表明されて  
いる。



幸いにもこの数年、先生に親しくお目にかかれる機会が多かった。先生は白内障で左右の視力が落ちて読書に不自由なことをいたく残念がっておられたが、近年の手術で徐々に癒っていた。まずまずの御健康状態であり、美代子夫人そして御長女詢子様（青山治郎先生夫人）、御長男仁之様、御次女酒井明子様、御次男真様、御三男智様など、立派に御活躍中の御家族に囲まれ、快活で御幸福な御様子で、御目にかかれれば御郷里のこと、ラフカディオ・ハーン

文庫のこと、清明集の明版本のことなど、磊落に話された。柳田節子教授の肝煎りで喜寿の御祝い、八〇歳の御祝いの会が設けられたとき、先生は満面の喜びで応えて下さった。中嶋敏先生の御苦心で『宋史食貨志譯註』再開の計画が発足し、周藤先生は「常平義倉」の旧稿の仕上げにとりかかれ、意気軒昂たるものがあつた。たまたま訪日された北京大學鄧広銘教授との交歓からはじまった日中宋史會議の計画にも、先生は参加の意欲を示され、八七年の九・一〇月にわたる一八日間、女婿の青山治郎先生と御一緒に、北京、西安、洛陽、開封、南京、蘇州、杭州、上海と、やや強行の旅を終始お元気で消化され、再度の訪中も企てられていた。周辺の私共は先生の御健康を固く信じて疑わず、ますます活発な先生の晩年の御活動を期待したのである。昨年夏、東京都世田谷区豪徳寺二一六一—

九の御自宅の二階書斎から階段を滑られ、歩行御不自由となつて入院され、半歳に充たぬ御療養の甲斐なく、先生はついに永眠遊ばされた。哀愁と寂寥の思は筆舌に尽し難い。御遺徳と御業績を追慕し、次世代の責を痛感する次第である。

### 著作目録

#### A 主 著

1 『清代滿洲土地政策の研究——特に旗地政策を中心として——』河出書房、一九四四年九月、本文四九五頁。

2 『宋代官僚制と大土地所有』日本評論社（社会構成史体系第八回）、一九五〇年八月、一五二頁。

3 『中国土地制度史研究』東京大學東洋文化研究所研究報告 同研究所、また東京大學出版会 一九五四年九月、本文七二六頁。

4 『宋代經濟史研究』東京大學出版会、一九六二年三月、本文八一六頁。

5 『唐宋社会經濟史研究』東京大學出版会、一九六五年三月、本文九二九頁。

6 『宋代史研究』東洋文庫（東洋文庫論叢五〇）、一九六九年三月、本文六八四頁。

7 『清代東アジア史研究』 日本學術振興會、一九七二年三月、本文七一六頁。

8 『高麗朝官僚制の研究』 法政大學出版局、一九八〇年一二月、五五八頁。

B共 著（記念論文集等に収められた共著論文は「C論文」に加えた。）

1 日野開三郎編『世界歴史大系6 東洋中世史3』 平凡社、一九三九年一〇月、「南宋の農民問題と宋の社会政策」、三〇頁。

2 上原専祿、江口朴郎、尾鍋輝彦、山本達郎監修『世界史講座』 東洋經濟新報社、一九五五年八月、「宋以降の小作制」、六頁。

3 下中弥三郎編『東洋史料集成』 平凡社、一九五六年一月、「第四篇 中国6 五代・宋代」、二〇頁。

4 和田清編『宋史食貨志譯註(一)』 東洋文庫、東洋文庫論叢四四、一九六〇年三月、「序」、「農田」、「方田」、「賦税」、「布帛」、六五五頁。

5 周藤吉之・中嶋敏『中国の歴史5 五代・宋』 講談社、一九七四年一〇月、「五代十国の推移と節度使体制」、「宋政權の成立と官僚体制」、「宋代の高麗朝」、「官戸形勢戸の土地所有と貨幣經濟・財政の拡大」、「王安石の新法——神宗朝の政治・財政改革」、「新旧兩党の抗

争と北宋の滅亡」、二四七頁。

C論文・※論評・※書評（A1、2……）は上記の各主著への再録ないしそれら著述に際しての新規執筆、「補」字は補訂加筆を示す。）

1 宋元時代の佃戸に就いて(一)(二)『史学雑誌』四四一—〇・一一、一九三三年一〇・一一月、六七頁、(A5附録一収)。

※2 「大原利武著『滿鮮に於ける漢代五郡二水考』」『青丘学叢』一四、一九三三年一月、四頁。

※補1 「足立喜六著『長安史蹟の研究』」『青丘学叢』一六、一九三四年五月、三頁。

3 「麗末鮮初に於ける農莊に就いて」『青丘学叢』一七、一九三四年八月、八〇頁。

※補2 「志田不動磨編『世界歴史大系4 東洋中世史1』」『青丘学叢』一七、一九三四年八月、三頁。

※補3 「小田先生頌壽記念會編『小田先生頌壽記念朝鮮論集』」『青丘学叢』一八、一九三四年一月、四頁。

4 「李施愛の叛乱について」『青丘学叢』一九、一九三五年二月、二頁。

※補4 「朝鮮史編修會編『朝鮮史』第四編第三卷」二〇、一九三五年五月、三頁。

※補5 「森谷克己著『支那社会經濟史』」『青丘学叢』二

○、一九三五年五月、二頁。

※補6 「今村軼著『人蔘史』『青丘學叢』二二、一九三五年一月、二頁。

5 「鮮初に於ける奴婢の辨正と推刷について」『青丘學叢』二二、一九三五年一月、六一頁。

6 「朝鮮後期に於ける田畚文記に関する研究」『歴史学研究』七十七・八・九、一九三七年七・八・九月、一七頁（A7補収）。

7 「高麗末期より朝鮮初期に至る奴婢の研究」(一)・(二)・(三)・(四)『歴史学研究』九一・二・三・四、一九三九年一・二・三・四月、一三七頁、(A7収)。

8 「高麗末期より朝鮮初期に至る田制及税制の改革」『史学雑誌』五〇—三、一九三九年三月、二頁。

9 「高麗朝より朝鮮初期に至る王室財政——特に私蔵庫の研究——」『東方學報』(東京)一〇—一、一九三九年一〇月、九六頁。

10 「清朝に於ける滿洲駐防の特殊性に関する一考察」『東方學報』(東京)一一—一、一九四〇年三月、二八頁、(A1補収)。

11 「清代の滿洲に於ける糧米の漕運に就いて——特に滿洲殖民史の一面として——」『東亞論叢』三、一九四〇年九月、二五頁、(A7収)。

12 「高麗朝より朝鮮初期に至る田制の改革——特に私田の変革過程と其封建制との関聯に就いて——」『東亞學』三、一九四〇年二月、七七頁。

※13 「社会經濟史学の發達、第二部、東洋社会經濟史、唐・宋(土地制度)」『社会經濟史学』一〇—一一・一二、一九四一年三月、七頁。

14 「清朝中期に於ける旗地の小作關係——戸部地畝檔冊の紹介を中心として——」『東方學報』(東京)一二—一、一九四一年五月、二六頁、(A7収)。

15 「清朝初期に於ける旗地の發展過程」『史学雑誌』五二—六、一九四一年六月、一頁。

16 「清初の入関前に於ける旗地の發展過程」『東方學報』(東京)一二—一、一九四一年七月、六四頁、(A1補収)。

17 「鮮初に於ける京在所と留郷所とに就いて」『加藤博士還曆記念東洋史集説』(富山房)一九四一年二月、一八頁。

18 「清朝に於ける旗地の構成」『社会經濟史学』一一—一・一二、一九四二年三月、七頁。

19 「高麗末期より朝鮮初期に至る織物業の發達——特にその財政的關係より——」『社会經濟史学』一二—一三、一九四二年六月、六二頁、(A7収)。

※20 「法学博士仁井田陞著『支那身分法史』」「社会経済史学」二二—四、一九四二年七月、四頁。

21 「清朝初期に於ける投充と其起源(上)・(下)」——特に投充旗地を中心として——『東方学報』(東京)一三—二・三、一九四二年七月・十一月、一五八頁、(A7補収)。

22 「清代前期に於ける佃戸の田租減免政策」『経済史研究』三〇—四、一九四三年一〇月、二三頁。

23 「清初に於ける畿輔旗地の成立過程——特に圈地の研究——(上)・(下)」『東方学報』(東京)一五—一・二、一九四四年五月・十一月、一三一頁、(A7収)。

24 「清代に於ける畿輔の撥補地に就いて——畿輔旗地設置の一研究——」『社会経済史学』一四—四、一九四四年七月、三〇頁、(A7収)。

25 「清代前期に於ける八旗の村落制」『北亜細亚学報』四(戦火のため未刊)、一九四五年、(A7収)。

26 「清初に於ける圈地と旗地繩量との関係——特に畿輔旗地を中心として——」『小野武夫博士還暦記念東洋農業経済史研究』(日本評論社)、一九四八年五月、二四頁。

27 「宋代の佃戸制——奴隸耕作との関聯に於て——」『歴史学研究』一四三、一九五〇年一月、二二頁、(A

3収)。

28 「宋代莊園の管理について——特に幹人を中心として——」『東洋学報』三二—四、一九五〇年四月、三二頁。

29 「宋代の鄉村における小都市の發展——特に店・市・歩を中心として——(上)・(下)」『史学雑誌』五九—九・一〇、一九五〇年九・一〇月、五五頁、(A5補収)。

30 「宋金時代に於ける莊園と佃戸の一考察——特に長安附近について——」『東方学』二、一九五一年八月、四頁、(A3収)。

31 「五代藩鎮の支配体制」『歴史学研究』一五三、一九五一年九月、一頁。

32 「五代節度使の牙軍に関する一考察——部曲との関聯において——」『東洋文化研究所紀要』二、一九五一年九月、七二頁。

33 「五代における均税法」『和田博士還暦記念東洋史論叢』(講談社)、一九五一年一月、一六頁、(A3収)。

34 「五代節度使の支配体制(上)・(下)」『史学雑誌』六一—四・六、一九五二年四月・六月、六一頁、(A4収)。

※35 「一九五一年の歴史学界——回顧と展望、宋・元——」『史学雑誌』六一—五、一九五二年五月、六頁。

36 「北宋に於ける方田均税法の施行過程(一)」「日本学士院紀要」一〇一二・三、一九五二年六月・十一月、五三頁、(A3収)。

※37 「加藤繁著『支那經濟史考証』上卷」「社會經濟史学」一八一四、一九五二年一〇月、二頁。

38 「宋代莊園制の發達」「東洋文化研究所紀要」四、一九五三年三月、七五頁、(A3収)。

39 「唐末五代の莊園制」「東洋文化」一二、一九五三年三月、四二頁。

※40 「矢野主税「唐代に於ける仮子制の發展」」「法制史研究」二、一九五三年三月、一頁。

41 「南宋末の公田法(ハ)・(ニ)」「東洋學報」三五―三・四、三六一―、一九五三年三月、六月、五四頁、(A3補収)。

※42 「東京教育大学史学研究室編『東洋史学論集』」「史学雜誌」六二―八、一九五三年八月、五頁。

43 「宋代官田の佃權売買——資陪又は酬佃交佃について——」「東方學」七、一九五三年一〇月、一二頁、(A3補収)。

44 「中国土地制度史研究序説——問題の所在——」、一九五四年三月、五頁、(A3収)。

45 「南宋に於ける屯田・營田官莊の經營」、一九五四年三

月、九六頁、(A3収)。

46 「宋代の兩稅負担——特に每畝の兩稅額について——」「一九五四年三月、四六頁、(A3収)。

47 「宋代の佃戸・佃僕・傭人制——特に「宋代の佃戸制」の補正を中心として——」、一九五四年三月、一二四頁、(A3収)。

48 「宋代資料に見える頭項と探馬——遼・元の投下との関聯に於いて——」「駒沢史学」四、一九五四年五月、二〇頁、(A6補収)「唐宋の資料に見える頭項・頭下と探馬——遼・元の投下との関聯に於いて——」。

49 「中国莊園の性格」「歴史教育」二一六、一九五四年六月、七頁。

50 「南宋に於ける麦作奨励と二毛作——佃戸制と関連させて——」「日本学士院紀要」一三一―三、一四一―、一九五五年九月、六八頁、(A4補収)「南宋に於ける麦作の奨励と二毛作」。

51 「南宋郷都の税制と土地所有」「東洋文化研究所紀要」八、一九五六年三月、一二二頁、(A4補収)。

※52 「岩村忍『元典章刑部の研究』」「法制史研究」六、一九五六年三月、一頁。

53 「宋代佃戸の剝佃制——官田を中心として——」「野村博士遷曆記念論文集」(有斐閣)、一九五六年三月、

二九頁、(A 5補収)。

54 「宋代の詭名寄産と元代漢人の投獻——佃戸制との関連について——」『東洋文化研究所紀要』九、一九五六年三月、六二頁、(A 5補収)。

※55 「満文老檔研究会訳註『満文老檔1 太祖1』」『史学雑誌』六五—四、一九五六年四月、三頁。

56 「南宋の圩田と莊園制——特に江南東路について——」『東洋文化研究所紀要』一〇、一九五六年一月、七二頁、(A 4補収)。

57 「宋代の典小作制」『法制史研究』七、一九五七年三月、三一頁、(A 5「宋代の典佃制」補収)。

※58 「清水泰次「明代の馱夫」」『法制史研究』七、一九五七年三月、二頁。

59 「南宋の李燾と「統資治通鑑長編」の成立」『駒沢史学』六、一九五七年一二月、三四頁、(A 6収)。

60 「南宋の農書とその性格——特に王禎「農書」の成立と関聯して——」『東洋文化研究所紀要』一四、一九五七年三月、七一頁、(A 4補収)。

61 「個人文書の研究——唐代前期の個人制——」『敦煌・吐魯番社会経済資料(B)』(西域文化研究会編、法蔵館、西域文化研究二)、一九五九年三月、六〇頁、(A 5補収)「吐魯番出土の個人文書研究——唐代前期の佃

人制——」。

62 「宋朝国史の編纂と国史列伝——「宋史」との関聯に於いて——」『駿台史学』九、一九五九年三月、三三頁、(A 6収)。

※63 「池田温「敦煌発見唐大曆四年手実残巻について」」『法制史研究』九、一九五九年三月、二頁。

※64 「鈴木俊「戸籍作成の年次と唐令」」『法制史研究』九、一九五九年三月、一頁。

※65 「曾我部静雄「中国の行政区画としての図の起原」」『法制史研究』九、一九五九年三月、一頁。

※66 「一九五八年の歴史学界——回顧と展望——東洋史総説」『史学雑誌』六八—五、一九五九年五月、四頁。

67 「唐代中期における戸税の研究——「周氏一族文書」を中心として——」『敦煌・吐魯番社会経済資料(B)』(西域文化研究会編、法蔵館、西域文化研究三)、一九六〇年三月、二四頁、(A 5補収)「唐代中期における戸税の研究」。

68 「宋朝国史の食貨志と「宋史」食貨志との関係」『東洋学報』四三—三、一九六〇年一二月、四八頁、(A 6収)。

69 「南宋の苧麻布生産とその流過程」『駒沢史学』九、一九六一年一月、一八頁、(A 4補収)。

- 70 「南唐・北宋の沿徴」『和田博士古稀記念東洋史論叢』（講談社）、一九六一年二月、（A4補収）。一二頁。
- 71 「南宋の田骨、屋骨、園骨について——特に改典就売との関係——」『東方学』二二、一九六一年三月、一四頁、（A5補収）。
- 72 「南宋稲作の地域性」『史学雑誌』七〇一六、一九六一年六月、五三頁、（A4補収）。
- 73 「南宋に於ける稻の種類と品種の地域性」、一九六二年三月、（A4収）、六七頁。
- 74 「南宋の農鍛冶と農具の販売」、一九六二年三月、（A4収）、一八頁。
- 75 「宋代州県の職役と胥吏の發達」、一九六二年三月、（A4収）、一六二頁。
- ※ 76 「一九六二年の歴史学界——回顧と展望、東洋史総説——」『史学雑誌』七二一五、一九六三年五月、六頁。
- 77 「陳傅良撰「建隆編」について」『岩井博士古稀記念典籍論集』（開明堂）、一九六三年六月、七頁、（A6収）。
- 78 「宋代鄉村制の変遷過程」『史学雑誌』七二一〇、一九六三年一〇月、六八頁、（A5補収）。
- 79 「北宋末の公田法と華北の諸叛乱」『東洋文化研究所紀要』三三、一九六四年三月、七四頁、（A5収）。
- 80 「古典研究会刊・静嘉堂文庫蔵「名公書判清明集」について」『大安』一〇一九、一九六四年九月、四頁、（A6補収）。
- 81 「南宋の耗米と倉吏・攬戸との関係」『鈴木俊教授還暦記念東洋史論叢』（三陽社）、一九六四年一〇月、（A6補収）。
- 82 「南宋の耗米と倉吏・攬戸との関係」補収。
- 83 「宋代の陂塘の管理機構と水利規約——特に陂塘長、团长、知首等について——」『東方学』二九、一九六五年二月、一五頁、（A5補収）。
- 84 「宋代の陂塘の管理機構と水利規約——鄉村制との関連において——」補収。
- 85 「佃人文書研究補考——特に郷名の略号記載について、一九六五年三月、四二頁、（A5収）。
- 86 「宋代の土地制度論——井田論・限田論を中心として——」一九六五年三月、八八頁、（A5収）。
- 87 「宋代四川の佃戸制——最近の研究を読んで——」一九六五年三月、六七頁、（A5収）。
- 88 「南宋の役法と寛郷・狹郷・寛都・狹都との関係」、一九六五年三月、三六頁、（A5収）。
- 89 「南宋の保伍法」、一九六五年三月、四五頁、（A5収）。
- 90 「新編事文類要啓削青錢」の成立年代とその中の契約証書との関係」、一九六五年三月、九頁、（A5収）。

- 89 「宋代浙西地方の畝田の発達——土地所有制との関係——」『東洋文化研究所紀要』三九、一九六五年二月、九二頁、(A 6 補収)。
- 90 「南宋における義役の設立とその運営——特に義役田について——」『東洋学報』四八—四、一九六六年三月、三九頁、(A 6 収)。
- 91 「北宋の三司の性格」『法政史学』一八、一九六六年三月、三七頁、(A 6 補収)。
- 92 「北宋に於ける三司の興廢」『駒沢史学』一三、一九六六年四月、二四頁、(A 6 収)。
- ※93 「一九六五年の歴史学界——回顧と展望、東洋史総説——」『史学雑誌』七五—五、一九六六年五月、五頁。
- 94 「宋代における税租鈔」『龍谷史壇』五六・五七合併号(小笠原・宮崎両博士華甲記念史学論集)、一九六六年二月、一三頁。
- 95 「王安石の新法とその史的意義——農民政策を中心として——」『仁井田陞博士追悼論文集 第一卷 前近代東アジアの法と社会』(勤草書房)、一九六七年一月、二〇頁、A 6 補収)。
- ※96 「仁井田博士を偲びて」『法制史研究』一七、一九六七年一〇月、三頁。
- 97 「宋代浙西地方の畝田の発展補論」『東洋大学大学院

- 紀要』四、一九六八年三月、一四頁、(A 6 収)。
- 98 「北宋における提挙在京諸司庫務司と提點在京倉場所の興廢」『白山史学』一四、一九六八年三月、二六頁。
- 99 「南宋斛斗マヌ考」、一九六九年三月、一〇頁、(A 6 収)。
- 100 「王安石の免役錢徴収の諸問題」一九六九年三月、七一頁、(A 6 収)。
- 101 「宋代佃戸の勞役」、一九六九年三月、一二頁、(A 6 収)。
- 102 「北宋四川の佃戸制再論」、一九六九年三月、二〇頁、(A 6 収)。
- 103 「王安石の青苗法の起原について」『東洋学報』五三—二、一九七〇年九月、四五頁。
- 104 「北宋前期の挙放・課錢と王安石の青苗法——有利負債法をめぐって——」『東洋大学大学院紀要』七、一九七一年三月、二三頁。
- 105 「王安石の青苗法の施行過程(一)」『東洋大学大学院紀要』八、一九七二年三月、二九頁。
- 106 「附録 朝鮮後期の田畚文記資料」、一九七二年三月、三〇頁、(A 7 収)。
- 107 「青苗法における客戸の貸付規定」『山本博士還暦記念東洋史論叢』(山川出版社)、一九七二年一〇月。



- 108 「北宋末、南宋初期の私債および私租の減免政策——宋代佃戸制再論——」『東洋大学大学院紀要』九、一九七三年二月、五〇頁。
- 109 「北宋末における青苗法の施行」『東洋大学大学院紀要』一〇、一九七四年二月、二六頁。
- 110 「高麗初期の官吏制度——特に兩府の宰相について——」『東洋大学大学院紀要』一一、一九七五年二月、(A8補収)、三一頁。
- 111 「宋と高麗との關係——宋側から見た高麗の官吏制度——」『朝鮮學報』七五、一九七五年四月、一四頁。
- 112 「高麗朝における三司とその地位——宋の三司との関連において——」『朝鮮學報』七七、一九七五年一月、(A8補収)、五一頁。
- 113 「保甲法における上下の分と逃亡の法——特に教閱保甲路について——」『榎博士還曆記念東洋史論叢』(山川出版社)、一九七五年一月、一一頁。
- 114 「高麗初期の地方制度——特に宋の地方制度との関連において——」『東洋大学大学院紀要』一二、一九七六年二月、四七頁、(A8補収)。
- 115 「高麗初期の鈴轄・巡檢と牽籠——宋の鈴轄・巡檢・牽籠官との関連において——」『東洋大学大学院紀要』一三、一九七七年二月、二八頁、(A8補収)。
- 116 「高麗初期の翰林院——宋の翰林学士・知制誥との関連において——」『東洋學報』五八—三・四、一九七七年三月、五四頁、(A8「高麗初期の翰林院と詔院」補収)。
- 117 「高麗の科挙制と宰相との關係——宋の科挙制との関連において——」『江上波夫教授古稀記念論集・歴史篇』(山川出版社)、一九七七年五月、二三頁、(A8補収)。
- 118 「高麗初期の内侍・茶房と明宗朝の武臣政權との關係——宋の内侍・茶房との関連において——」『東方學』五五、一九七八年一月、一七頁、(A8補収)。
- 119 「高麗初期の宰相、尚書右僕射について」『古代東アジア史論集』(末松保和博士古稀記念會編、吉川弘文館)、一九七八年三月、三五頁、(A8収)。
- 120 「高麗前期の宝文閣——宋の諸閣学士・直学士・待制等との関連において——」『朝鮮學報』九〇、一九七九年一月、五三頁、(A8補収)。
- 121 「宋代の三館・秘閣と高麗前期の三館とくに史館」一九八〇年一二月、(A8収)、九八頁。
- 122 「高麗朝の京邸・京主人とその諸關係——唐末・五代・宋の進奏院・邸吏および銀臺司との関連において——」『朝鮮學報』一一一、一九八四年四月、五一頁。

123 「高麗初期の功臣、特に三韓功臣の創設——唐末・五代・宋初の功臣との関連において——」『東洋学報』六六一・一二・三・四（創立60周年記念特輯號）、一九八五年三月、三三三頁。

124 「高麗初期の中樞院、後の樞密院の成立とその構成——唐末、五代、宋初の樞密院との関連に於いて——」『朝鮮学報』一一九・一二〇、一九八六年七月、四〇頁。

125 「唐末淮南高駘の藩鎮体制と黄巢徒黨との関係について——新羅末の崔致遠の著「桂園筆耕集」を中心として——」『東洋学報』六八一・三・四、一九八七年三月、三六頁。

126 「新羅末の文士崔致遠伝——とくに同年進士の友顧雲の事蹟について——」『東洋大学東洋史研究報告』四、一九八七年三月、一一頁。

※127 「王雲海著『宋会要輯稿考校』」『東洋学報』六九一・三・四、一九八八年三月、一一頁。

※128 「徐規著『王禹偁事迹著作編年』」『東洋学報』七〇一・二、一九八九年一月、九頁。

129 「宋史卷一七六 食貨上四 常平義倉訳註」（遺稿、旧稿二〇〇字詰八五枚、修訂稿四〇〇字詰四一枚）。

周藤吉之博士 (1907.2.25-1990.1.21) 業績・履歴簡表

| 年代    | 業  |   | 績                       |   | 履歴   |
|-------|--|---|-------------------------|---|--|
|       | 朝鮮史  | 清初・中期史  | 宋代史                     |   | 書評・論評等   |
|       | 高麗史・李朝史  |   | 唐五代                     | 宋元  |  |
| 1930s | 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9,                                   |   |                         | 1, <u>B1</u> ,  | 2, 補1, 補2, 補3, 補4, 補5, 補6,                           |
| 1940s | 12, 17, 19,  | 10, 11, 14, 15, 16, 18, 21, 22, 23, 24, <u>A1</u> , 25, 26, |                         |   | 13(唐宋), 20,  |
| 1950s |  |   | 31, 32, 33, 34, 39, 61, | 27, 28, <u>A2</u> , 29, 30(宋金), 36, 38, 41, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49(中国), <u>A3</u> , <u>B2</u> , 50, <u>B3</u> , 51, 53, 54, 56, 57, 59, 60, 62,                                       | 35(宋元), 37, 40, 42, 52, 55, 58, 63, 64, 65, 66(東洋史), |
| 1960s |  |   | 67, 83,                 | <u>B4</u> , 68, 69, 70(南唐・北宋), 71, 72, 73, 74, <u>A4</u> , 75, 77, 78, 79, 80, 81, <u>A5</u> (唐宋), 82, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 94, 95, 97, 98, 99, 100, 101, 102, <u>A6</u> , | 76(東洋史), 93(東洋史), 96,                                |
| 1970s | 106, 110, 111, 112, 114, 115, 116, 117, 118, 119, 120, | <u>A7</u> ,   |                         | 103, 104, 105, 107, 108, 109, <u>B5</u> (五代・宋), 113,  |  |
| 1980s | <u>A8</u> , 122, 123, 124, 126(新羅),                    |   | 125                     | 121, 129,   | 127, 128,  |

A1, 2, ~8は主著, B1, 2, ~5は共著,  
1, 2, ~129, 補1~補6は論文, 書評。